

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕

主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようと思しますが、四王天と息子十次郎に諫められ、

改めて天下取りの戦へと向かいます。

尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつた久吉が一夜の宿を乞うのです。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

〔**尼ヶ崎の段**〕 最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのです。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

尼ヶ崎の段

月漏る片庇

こゝに蒞り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出でたる武智光秀。

「必定、久吉この家に忍びゐること究竟一。たゞ一討ち」

と気は張り弓、心は矢竹藪垣の、見越しの竹をひつそぎ鏢、小田の蛙の鳴く音をばとゞめて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺ひ寄る。聞こゆる物音『心得たり』と、突込む手練の鏢先に、『わつ』と玉ぎる女の泣き声、『合点行かず』と引出す手負ひ、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒、

「ヤ、ヤ、ヤ、こは母人か、死なしたり。残念至極」とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たる

ばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊もろとも走り出で、

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」

と縋り嘆けば、目を見開き、

「ヤレ嘆くまい、嘆くまい。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一类。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名に穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の通さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に優るぞや。おのれが心たゞ一つで、験しは目前これを見よ。武士の命を断つ、刃も多しこの様な、引つそぎ竹の猪突き鏢。主を殺した天罰の、報ひは親にもこのとほり」

と、鐘の穂先に手をかけて、多ぐり苦しむ気丈の手負ひ、妻は涙にむせ返り、

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐも、お諫め申したその時に、思ひ止つて給はらば、かうした嘆きはあるまいに、知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞいなう。せめて母御の御最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしたべ。拜むわいの」

と手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鑑曇りなき、涙に誠あらはせり。光秀は声あらうげ、

「ヤア猪口才な諫言立て、無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる尾田春長。もちろん三代相恩の主君でなく、わが諫めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々増長すれば、武門の習ひ天下のため、討取つたるは

わが器量、女童の知る事ならず。退きりをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇気の眼色、取りつく島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響き、『あはや』と見やる表口、数ヶ所の手傷に血は滝津瀬、刀を杖よろほひく、立帰つたる武智が一子、庭先に大息つき、

「親人くこれにおはするや」

と、言ふも苦しき断末魔、見るに驚く母親より娘は側に走り寄り、

「ノウいたはしや十次郎様。祖母様といひお前までこのあり様は情けない。お心確かに持つてたべ、やいのく」

と取り付いて、介抱如才なくばかり。光秀わざと声あらうげ、

「ヤア不覚なり十次郎、仔細はなんと、様子はいかに。

つぶさに語れ」

と呼ばれば、『はつ』と心を取直し、

は」

「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの

一騎駆け。乱軍なれば生死の程も、確かにそれと承は

らず。親人の御身の上心にかゝり候ゆゑ、未練にも敵

を切抜け、これまで落延び帰りしぞや。この所に御座

あつては危し、危し。一時も早く本国へ引き取り給へ、

サア、早く〜」

と、深手を屈せず父親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞くに

老母はせきかねて、

「アゝアレ、あれを聞きや嫁女、その身の手疵は苦に

もせず、極悪人の倅めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ

光秀、子は不便にないか、可愛いとは思はぬかやい。

おのれが心たゞ一つで、いとし可愛いの初孫を、忠と

義心に健気なる討死でもさす事か。逆賊不道の名を穢

し、殺すはなんの因果ぞ」

「ヤアいひ甲斐なき味方の奴ばら。シテ四王天田島頭

と、息継ぎあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立ち、

残らず討死仕り、無念ながらもたゞ一騎立帰つて候」

し、四角八面に切立てられ、また〜く間に味方の軍卒、

目に物見せてくれず』と、言ふより早く太刀抜きかざ

の家臣加藤正清これにあり、逆賊武智が小わつぱ共、

先途と戦ふうち、後の方より大音声。『真柴筑前守久吉

て敵は敗亡、うろたへ騒ぐを追立て、追詰め、こゝを

つて味方の軍兵縦横無尽に薙立つれば、不意を打たれ

〜都へ馳せ上る、真柴の軍勢ごさんなれと、関をつく

れとも白浪の、艀を押切つて陸路に漕ぎ付け、追ひ／

に陣所を固め、今や帰国と相待つくところに、敵はそ

れとも白浪の、艀を押切つて陸路に漕ぎ付け、追ひ／

と、せぐり苦しき老いの身の声聞きつけて十次郎、

「ヤア、そんなら祖母様には、御生害遊ばしたか。今生のお暇乞ひ、今一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」

と手を取つて、妹背の別れ愛着の、道に引かるゝいちらしさ、母は涙に正体なく、

「討死するは武士の、習ひといへど情けない。十八年の春秋を刃の中に人となる、いつ楽しみの隙もなう弓矢の道に日をゆだね、今朝の門出のその時にも『母様今日の初陣に、天晴れ高名手柄して、父上や祖母様に誉めらるゝのが楽しみ』と、にっと笑うたその顔が、わしや幻にちらつて、得忘れぬ」

と口説き立て、口説き立れば初菊も、

「ほんに思へばこの身程果敢ない者が世にあらうか。

解けて逢ふ夜のきぬぐも永き名残りの許婚、二世を結

ぶの枕さへ、交はず間もなうこの様な、悲しい別れをすることは、マどうした罪か情ない。私も一緒に殺してたべ、死にたいわいな」

と身を悶え、互ひに手に手を取り交はし、名残り涙の暇乞ひ、見るに目もくれ心消え、母も老母も声を上げ、『わつ』とばかりに取り乱せば、さすが勇気の光秀も、

親の慈悲心子ゆるゑの闇、輪廻の絆に締めつけられ、こらへかねて、はら／＼／＼、雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐごとくなり。